

基調講演

「心地よい人間関係を築いていくために ～男女平等の視点で考える学校教育～」

講師：秋田大学教育文化学部教授
澤井 セイ子

(略歴)

お茶の水女子大学卒。同大学大学院修了。家政学修士取得。秋田大学教育学部助手、専任講師、助教授、アイオワ州立大学家族・消費者科学部客員教授を経て現職となる。専門は生活経営学・家政教育学。著書に「家庭科教育実践講座 家族と共につくる家庭生活」「21世紀のライフスタイル」「家庭生活の経営と管理」「Strength of the Families in the Early 2000's」などがある。



私は、「学校教育でもう少し男とか女とか言わないでくれたらいいよね」という話をします。なぜかという、子どもたちから「男の子だから、女の子だから」と自然に言葉に出てくるんです。でも、これは学校教育だけじゃなくて家の教育も関係してくるようです。すべてどこがよいとか悪いとか言えないのですが、現代社会は、特に人間関係の中でしか生きていけないということがあると思います。私たちは物を作ると言いますが、物を作るのは機械であって、人間が物と向き合っ物を作っていくということは、ほとんどなくなってきていますよね。生活が変化して独りで生きていけるということは、決して独りで生きているのではなくて、いろいろな社会システムとかかわって生きているのだ、とよく言います。例

えば、昨日弘前のホテルに泊まったのですが、そこではベッドをつくらなくてもそのまま出てこれます。私は独りで生きているけれど、それをやってくれる人もいます。これも一つの間人間関係ですよ。目に見える人間関係と、目に見えない人間関係がありますが、目に見えない人間関係はどうして楽かという、多分それはお金で片付けられる社会だからだと思ひます。家の中でごはんを食べようと思えば、「ありがとう」と言わなければいけない。外で食事をしたら「ありがとう」とは言わないで、「食べてくださってありがとう」と言われるわけですね。そんなふうに、直接目に見える人間関係は難しいけれど、直接目に見えない人間関係が多くなり、それは決して心地よいものではないわけです。私は、心地よい人

間関係は、やはり生の人間関係で、お互いにかかわり合いがあるということだと思います。

資料 1. に国分康孝さんの「人間関係の原理」を紹介しました。人間関係をつくっていくためには、「得体の知れない人にならない」とはどういうことかという、何を考えているかやっぱりある程度分かっていないと人間関係をつくれません。自分ばかり情報を持って、相手は情報を持ってない、これもあまりよい人間関係はできません。得体の知れない人というのは、お互いに何を考えているのかとか、どういうことが好きなのかとか、わかる人間関係なんだろうと思うんです。

二つめの「非言語的表現を使う」とは何かというと、これはよい関係を作りたいと思えばお花をあげたり、好きなお菓子を持って行ってあげたりすることが非言語的表現であり、あるいは直接何かものを言うかわりに、別の言い方をするとするのもありますよね。例えば、しかなければいけないところを、しかるだけではなく褒められるところを見つけてとか、直接しかる前や、しかる後「こんなにいいところがあるよ」など皆さんやってらっしゃると思います。

三つめの「自己イメージをポジティブにする」は、「私なんか・・・」と言って自分の事をすごく卑下する人と付き合っていると、だんだん嫌になってきますよね。日本はどちらかというと、付き合いのときに自分を褒めてはいけませんよね。「私はできません」と言わないと駄目ですよね。私はすごく古い人で、ケネデ

ィ大統領が暗殺された時にアメリカの大学にいたのですが、いろいろな人に紹介される時「私は、あまり英語がしゃべれないですけど」と言うと、「今しゃべっているからいいじゃない」と言われます。また「私は、日本語しゃべれないけれど、あなたはそれだけしゃべれるからいいわよ」とも言われました。私が、何回か「しゃべれない」と言っていると、本当にしゃべれないのかと思って付き合ってくれない人も出てきます。

一番、謙遜的な生き方というのはよくないなと思ったんですね。その当時日本人は少なかったので、よくパーティーに呼んでくれるのですが「私、行っていいの」と、日本だったら言うじゃないですか。そのように言っていたら、そのうち誰も誘ってくれなくなっただけです。「どうして私を誘ってくれないのだろう」というと、「だって、あなた、行きたいように見えないから」と言われました。それは、すごくショックでした。行きたいからこそ、「私、行っていいの」と言っていたわけですよ。日本の文化だったら、多分そのように言わなければいけないのだろうけど、アメリカの文化だったら、そう言うてはいけないのだなと思いました。この辺のところも、自己イメージでいくとやっぱり「駄目」とか「嫌」とか「行っていいの」とかそのような態度は、日本ではよいと言っているけれど、人と仲良く付き合おうと思うと、あまりよくないですよ。

四つめの「ギヴ・アンド・テイクができる」も、もらったりするだけとか、あ

げているだけとかでは人間関係は成り立たないですよ。ではギヴ・アンド・テイクで、これをもらったからすぐこれを返すという、またこれも成り立たないですよ。よく思うのが、私の姉は勤めたこともなくずっと専業主婦をしているのですが、何か人からいただくとすごく真剣にお返しを考えるわけです。あきらかに形だけでくださったものでも、一生懸命時間を掛けてお返しを考えるんですね。でもよくよく考えてみると、私のアメリカの友人のやり方ですが、これは本当に心を込めて考えなければいけない人、あるいは形式でやっていい人だとかそういう区分けの仕方をするんですね。その友人に聞いて、おもしろいと思ったのは、人間関係すべてうまくいくわけじゃないから、この人とは本当に付き合いたいとか、この人とはあまり合わないとかそういうのをつくってもいいんじゃないのかということです。けんかするとか、別れるのではなくて、人間関係というのは、すごく濃厚に付き合いたい関係と、この方とはこの形で付き合う、誰とでも同じような人間関係をつくるのは難しいと言われました。結局居心地のよい関係をつくらうと思ったら、誰とでも真剣に付き合うことはできないですよ。やっぱりそこで選択みたいのが出てくるわけです。

五つめの「自分を知り、相手を知る」ですが、濃厚な関係を作ろうと思ったら、自分の事も相手の事も知っていなければいけない。人間関係すべて同じではなくて、これは大事な関係、またこれはこの部分だけの関係というように区別されて



おり、この関係の時には相手をどこまで知ればよいか、というのが出てくるのだと思います。

六つめの「役割（責任）を果たすと同時に、感情交流ができる」とは、私一人の人間を見ても、教師というのもあるし地域の町内会会員とか、いろいろ役割を持っているのですが、そういう時に、どの役割、地位を優先していくかとか、そういう地位に要求されることは何だろうかというのがありますよね。例として、おもしろい離婚の判例を聞いたことがあります。とてもよい旦那さんで、役割をきちんとやってくれるそうなのですが、奥さんが、今から外出しなければならなくなり、旦那さんに「今日はどうも雨が降りそうだけど、洗濯物を干していくから、夕方になったら取り込んで下さい」と、頼んだそうです。3時頃に雨が降り出し、もしかしたら、あの旦那のことだから洗濯物を取り込んでないかもしれないと思い、急いで帰って来たら、案の定、洗濯物は取り込んでなかったそうです。

「あなた、どうして雨が降るかもしれないと言ったのに、洗濯物を取り込んでくれなかったの」と言ったら、「雨が降るか

もしれないとは言ったけれど、雨が降ったら入れてくれとは言ってなかった。夕方になったら入れてくれと言っていたから、だから入れなかったんだ」と言われたそうです。そして、このようなことが何回か続いて、とうとう奥さんが「離婚してください」と言ったそうです。役割はするけれど感情交流ができないのは、相手を思いやるとか、周囲を見渡せる力みたいな事も要求されているということだと思います。感情交流とは、やっぱり仕事プラス何を考えるかということです。私たちもそうですが、教師は何をやっているかということ、授業をするだけではなく、学生がどう交流してくるかというのがあって、交流ということになるとやはり教えるだけではなく、プラスアルファが出てきます。居心地いい人間関係は、仕事だけだったらつくれないのではないかと思います。

七つめの「集団（組織）を成立させる原則であるタテ関係のあることを忘れない」とは、いくら親しくてもやってよいことと、悪いことがあるということです。それをはっきりさせておかないと、居心地のいい人間関係はつくれないということだと思います。職場の中でそれぞれ役割があり、その役割を越えてそれがなくなっていく関係を作ってしまうと、やはり駄目だというのがあります。これはアメリカの大学に行っていた時に、私と5歳くらいしか離れていないカナダ人の女の先生が、新しく大学教師として来ました。その方は、日本の滝を研究していて、私によくしてくださいました。時々いろ

いろなところに連れて行っていただき、先生の名前を普段は「ドクター・アンダーソン」ではなく「カトリーヌ」と呼びなさいと言われました。授業の時に「カトリーヌ」と言ったら、すごくしかられました。そのころは、ファーストネームで先生のことを呼ぶという習慣がなく、「私は、教師をやっているのだから、きちんとした名前でもらわなければ困る」と言われました。親しくしているからいいと思っけていても、やる場所、やらない場所をわきまえ、それがタテ関係だと思っています。

八つめの「外見だけで判断しない」とは、学生なんか見えていても同じような格好をしている人が集まって、グループを作っていますよね。例えば、いつもは短いスカートをはいている人たちでも、教育実習では短いスカートではなく、きちんとズボンをはいて、動きやすい格好で行っているわけですね。それ以来、私は外見では判断しないようにしています。外見で判断しないということも、すごく重要な人間関係の要素になるのではないのでしょうか。

九つめの「権限（行動の許容される範囲）を知る」とは、例えば、いろいろな家族のタイプを調べると二つタイプがあります。一つは、息子夫婦の家に、おじいさんとおばあさんが来た場合と、もう一つは、おじいさんとおばあさんの家に、息子夫婦が来て一緒に住んだ場合があります。これは、権限が違うということですね。息子夫婦の家に来た場合は、息子夫婦に家の使い方など一応相談すべきで

すよね。一方、息子夫婦が親の家に入ったら、親が決定権を持っているわけですよ。これも裁判の事例ですが、息子家族の家に入って来た親が、息子夫婦が出かけている間に、友達を大勢呼んでドンチャン騒ぎしたようです。もちろん裁判例で出てくるわけですから極端な例ですが、その騒ぎで家の物を壊してしまいました。それに対して奥さんは怒ってしまいましたが、親は「ここは、息子の家だからいいだろう」と言い、奥さんは「息子の家かもしれないが、自分たちに断ってから友達を呼べばよかったじゃないですか」と言ったそうです。これが、権限という問題にかかわってくるわけですね。

居心地のいい人間関係を持つほど、すごくストレスの少ない生活ですが、居心地のいい関係が持てなくても、人間は自分の人生ですから、他のところで見つけるようにすればいいわけです。人間関係がすべてではないですが、現代社会とはどう居心地のいい関係をつくっていくかということが、ストレスの少ない社会、生き方ができるというように考えます。いろいろな例を言ってきましたが、居心地のいい人間関係は、結局自分がつくっていかざるをえないでしょう。以前は、例えば、高い地位の人が言っていることに従うことが居心地のいい関係でした。社長が言っているのだから、本当はいろいろな文句などがあっても、社長の居心地のいいようにしていました。その時代は枠組みがあって、自分がどういう枠組みの中にいるかにより、行動や人間関係が決まってきたわけです。主従関係、男だ

ったらこうするべき、女だったらこうするべき、社長だったら、事務員だったらなどの枠組みでやってきました。この枠がいろいろな意味で問題になってきているわけですね。その中で、基本的に一番多く出てきている、男だから女だからという枠組みが、今の社会に合わないというのが出てきました。昔の居心地のいい人間関係は、上になればなるほど居心地のいい関係ができるわけですよ。「社長がそのように言っているのだから、言うことを聞きましょう」や「校長先生が言っているのだから、おかしくても従わざるを得ない」と言うかも知れません。校長先生はすごく居心地がいいですよ。でも、下の人とはとてもじゃないですがやり切れません。しかし、校長先生に「こういうのは、おかしいのではないですか」と言える感じがあれば、すごく気が楽ですよ。地位という枠組みがあり、言われた通りするしかないということが、今、社会で揺れ動いているのだらうと思います。

例えば、内部告発も同じで、「この会社の社員だから内部告発なんておかしいじゃないか」と言っても、自分にとっていいのか悪いのかを言うようになる。今まで内部告発をしたら、絶対にその会社で偉くなれないというのがありました。しかし、最近富山で内部告発をした人が裁判をした結果勝ち、ずっと倉庫番などをさせられていましたが、きちんと補償金をもらったというのがありました。今、枠組みが崩れかかっているのだらうと思います。その典型的なものが、男だから



女だからという枠組みなのだと思うのです。

資料2のいろいろな言葉をみていただきたいと思います。現代社会は、個人が優先される社会になってきました。枠組みではなくて、個が優先される社会になってきたということだと思います。例えば、少子化とよく言われますが、「今、女の人があがままになり、子どもを産みたくない」と言う人がいます。しかし、子どもを産むということは、すごく大変なことですよね。10か月間、身体も行動も制限されるわけですよね。そして生まれてからも、身体が戻らない人もいますよね。ましてや、子どもを産むことがどれくらい社会的な評価を得るかということ、それほどでもないですよね。私の友人は、私よりよほど優秀でしたが、専業主婦をしていて、子どもに「どうして澤井さんはこうやっているのに、ママはやらないの」と、小さい時よく言われたと言っていました。社会的な地位として評価されるとしたら、子どもを持つということが必ずしも地位と結びついていないわけですよね。今の社会、「あの人はお母さんだから、働いている女性よりいい」という

評価は無いですよ。今の評価の仕方を変えなければ、子どもをどんどん産みたいという考えは、出てきませんよね。

晩婚化というのもそうです。結婚をしてしまうと、職場でも働いて家のこともするとなると、どうしても女性のほうに負担がかかってきて、思うように仕事ができない。そうなるとう仕事ができる、できないの差が出てきます。だったら、仕事を覚えたほうがいいというようになり、必然的に晩婚化になっていく。そこで何かおかしいかということ、女だから家の仕事をするという枠組みがあるからですよね。実は大分前に、小学校の女子教員に「家事労働の分担」というアンケートをしました。そして核家族というのを1つのグループにし、新婚期や子どもの数、子どもが幼稚園以下等にわけてみました。すると、夫の職業が何であろうと、一応きちんと夫も家事を手伝っているわけです。これはもう、実際にそうせざるを得ないからだだと思います。しかし、子どもが中学生くらいになってくると、夫が手伝っているかいないかに違いが出てくるわけです。夫が手伝っている人は、妻も働いているのだから、自分も分担できる場所は分担しようというように、家事に対して革新的な考えを持っている人です。一方、子どもの手がかからなくなると家事をやらなくなる人は、伝統的な考えの人です。今は、伝統的な考えを持っていてもそれには関係なく、妻が要求すれば、夫がやるというようになっていいます。その辺りも個人がどう思うかというのが、すごく色濃く出てきています。

資料2を見ていきますと、選択縁というものがあります。これは何かというと、血縁はわかりますよね。地縁もわかりますよね。地縁とは、町内会の人全員と付き合う、という意味です。すごく悪い言葉で言えば、これまでいろいろな離婚の判例をみていると、男性は親の方を取ったという時代から、自分の妻の方を取る時代になってきました。これも1つの選択縁ですよね。歳をとった方から言わせると「今の男はだらしなくなった。自分の妻もコントロールできない」と言います。そうではないですよ。夫がどっちを取ったかという選択をしたわけです。選択縁をするのでも、自分の判断が必要になるわけですよ。もし、男だからこうしなければいけない、女だからこうしなければいけないという枠があったら、とても選択ということはありませんよね。現代社会というのは、個人が優先されているということです。

もう一つ、個人が優先されているからこそ、自分がどう考えているかということがすごく重要になってくるわけですよ。自分がどのように考えるかということが出来るから、判断ができるわけです。



よね。もう一ついえば、女だからということに納得していれば、女だからというジャッジを持って選択してもいいわけですよね。

ライフスタイルの創造というのが最近言われるようになりました。では、昔はライフスタイルが無かったのかというと、昔だってあったわけですよ。私などの時代は、専業主婦というのが女の人のライフスタイルでした。それは、与えられるライフスタイルでした。男の人は、家事などはやらないというのがライフスタイルでした。今、言われているライフスタイルの創造とは、自分らしくということで、自分がどういう生き方をするかを選べる時代になったから、ライフスタイルという言葉が出てくるわけですよ。ライフスタイルとは生き方ですから、女の人は結婚して子どもを産まないと駄目だというのも、一つのライフスタイルだったわけですよ。今言っているのは、自分がどうしたいかを選べるということです。

これらを見てもわかりますように、個人が優先される時代だから、子どもの権利条約などもあるわけです。よく、子どもの権利条約とは何ですかと聞かれますが、親が子どもを勘当することは昔からあるが、今の時代、子どもが親を勘当できる時代であり、これが子どもの権利条約を表しています。昔は尊属殺人というのがあり、自分より上の人を殺した場合の罪と、自分より下の人を殺した場合の罪、要するに、親を殺した場合と子どもを殺した場合の、罪の重さが違います。

今、そのようなことは無くなりましたよね。新聞などを見てもありませんよね。ということは、年齢だとか男だとか女だとかではなくて、選ばれている。これが子どもの権利条約です。世の中は、よいとか悪いではなく個人を優先し、個人を優先しても私たちが生きていける社会になってしまいました。

例えば、「ご飯なんか作りたくない」と言っても、昔は誰かがごはんを作ってくれなければ、食べられませんでした。今は、外に行ってお金で買って来ることができるようになり、こういう個人が優先される時代になってきたから、枠組みも、自分が納得した枠組みならいいけれど、他の人に与えられる枠組みは嫌だということですね。これが、自分らしくということですね。他の人に与えられたのではなく、自分で決めていくということですね。昔は、生活分業というのがなければ生活できなかったと思います。原則として、家でしかご飯を食べられない。そうしたら、朝から晩までご飯を作ってもらわなければ困るわけですよね。ましてや、スイッチをポンではないわけですから。ご飯を炊くのも最初から薪でやるとか、ガスになったとしてもお釜のフタを開けたり閉めたり、火を細めたりだとかいろいろ工夫しなければいけない。今はそんなことは、全く関係なくなりましたよね。結果しか出てこないわけですから。その時代、洋服もそうだし、あるいはお布団を作るというのも、他から買ってこれなければ、全部自分でやらなければいけなかった。また、家でやらなければいけな

い時代。それは、誰かが専属でやった方がいいわけですよね。女だったら全部やれたかということ、そうではなくて、お手伝いさんがいる人はやってないわけですね。お弁当などもそうですよね。ある人はお手伝いさんが、お昼ご飯になるとお弁当を届けてくれた。大学は日本女子大学の家政学部に行っていたけれど、ご飯は作ってないわけですよね。それはいくら家政をやっても、女性であっても、そういう仕事をやらなくて済んだ人だからです。そういう人達は、自分の仕事がないからおかしいということに気が付いたのではないのでしょうか。しかし、朝から晩までそのようにやらなければ、食べていけない。男の人も、一生懸命働かなくては、両方、力を合わせてやらなければ食べていけない、生きていけない時代。このことを考えてみれば、男女平等とか誰も思わないのではないのでしょうか。中世の人でも明治の人でも全然言ってないわけで、私の父や母も全然そのように思わなかったと思います。女の人が台所をやるのは、当たり前だと思っていたところがあるのではないですか。男女平等になるかもしれない社会は、そのようになっていない。システムと現実とが合わなかった時代が、私なんかの時代だったわけです。今、システムもそのようになってきているから、八戸の男女共同参画基本条例、あるいは政府の中にも男女共同参画局などもできています。システムはできてきたけれど意識が変わっていかなくて、枠を与えていく。このことが出てきているのだと思います。そうなってくると、男だからとか

女だからではなくて、自立というのが要求されてくるということです。

資料 3 に、自立ということで五つ挙げました。1 番の「精神的自立」とは、自分で考えることですよね。これは、長い間、男性がやってきたことなのです。どうということかということ、戸主権がある。男性の戸主が、家族がどこに住むかとか、何の職業につくか、誰と結婚するかとか全部決めてきたわけですね。精神的な自立を、女性の代わりに男性がやってきた。男性でも家父長という人がやってきた、ということですよね。でも今、恋愛結婚が増えたということは、女性も精神的自立が求められるということですよね。選択ができるようになったということは、自分で考えなければいけないということです。ですから、他の人の責任にできない時代になってきたということです。

2 番の「自事的・生活的自立」は、長い間女性に要求されてきたことです。それは、家事や裁縫ができるようになるということです。自事とは自分の事をやることで、家事とは他の人のためにやることです。自事は、自分で食べたり寝たりできることであり、これができれば、必然的に家事ができるわけですね。この時にいつも言うのですが、自事には「さ・し・す・せ・そ」があります。「さ」は裁縫で、縫うという意味ではなく、ボタンが取れたら付けられるということです。「す」は炊事で、食べられるということです。「せ」は洗濯、「そ」は掃除です。「し」は長いこと「しつけ」と言われていました。この「さ・し・す・せ・そ」

で女の仕事と言われていました。家政学部などは、衣服学科、食物学科、住居学科そして児童学科があります。私は、最初文教育学部でしたが、途中で中退し、アメリカの大学に行き、たまたま大学の友達が家政をやっており、その友達と仲良くなりやりましたが、これらは女の仕事とされていたことです。

でも、ほかは物ですが「しつけ」は人ですよね。物で自立を考えていくと、「し」は何が入るかということ、ショッピングを入れたいですね。ショッピングは、誰にでもできるわけですね。どうということかということ、ボタン付けが面倒ならボタンの無いものを買ってあげればいい。あるいは炊事もそうです。昨日秋田の雄勝町の生活科の臨時講習をやっていたのですが、そのスーパーはすごくおもしろいです。お総菜の焼き魚が 5 切れや 6 切れ、7 切れと売られていたのです。秋田市などは、1 切れや 2 切れで多くて 4 切れぐらいです。国勢調査で雄勝町の家族形態をみると、3 世代が多いのです。そうすると、お総菜を買うとき 4 切れを 2 つ買うよりも、6 切れや 7 切れを 1 つ買う方がいいわけですね。雄勝町などは、もしかしたら炊事はやらなくてもいいのかもしれないですね。どう買うかということが重要ですね。それから、洗濯もそうです。私はホテルに 2 週間くらい泊まったりするのですが、みなさん、今度ホテルに泊まったときにクリーニングの用紙を見てください。今は、下着も洗濯に出せるのです。最近になって、下着まで洗ってくれるということを知りました。昔な



ら下着は恥ずかしいから、自分で洗ってという感じだったと思いますが、最近は無くなったんだなと思いました。これも、お金でできるわけですね。ショッピングにかかってくるわけですね。選択になるわけです。

掃除もそうですね。1年に1回ダスキンにやってもらおうと、隅々まで全部きれいにしてくれます。莫大（ばくだい）なお金がかかりますが、電気も全部はずしてやってくれますし、おふろもやってもらおうといいですよ。最初、私は掃除があまり好きではないので、ダスキンにお願いした時に、「家の仕事をお金でやる」と上の先生にすごく怒られました。でも「嫌なことをやらないで、お金で済むのならばいいのではないですか」と言ったら、「お金を無駄遣いするな」と言われました。しかし、これは個人金銭だから昔ならばお金が大事だっただろうけど、自分でお金を払う方が、嫌だ嫌だと思って掃除するよりいいからやっていい社会だと思います。

これらのショッピングが、今、すごく重要になってきています。自事的の「自事」とは、このことを言っているわけで

すね。ですから、生活的では、ごはんを食べたりなどありますが、基本はどうショッピングするか、どうお金を使っていくか、これが自事的なものになるのです。

3番の「経済的自立」は、男性に要求されてきたものです。だから、女性は早期退職しなければいけない、あるいは働くとかあったわけですね。私たちの時代は、4年制の大学を出たときに、専門職は別ですが普通の会社に勤めようとする、4年制大学を出ていても高卒と同じだったのです。例えば、高卒で入社して初任給が3万円だったら、大卒は4年間働いた分の昇給を加えて3万4千円になりますが高卒の資格なのです。これは、女性は働かないと言うことを意味しています。だから、女性が外で働くのは社会勉強と言われました。あの年代は、経済的自立は男性に求められ、女性には求められませんでした。

4番の「社会的・市民的自立」は、一番典型的に出てくるのが、投票とかですね。皆さん、PTAの会長さんは女性が多いですか、男性が多いですか？学校の保護者会に出てくるのは、男性が多いですか、女性が多いですか？矛盾していると思いませんか。この「社会的・市民的自立」は、男性に求められていたということですね。投票権も男性にしか無かったということです。もう1つあります。人間は子どものころ、誰かに依存しなければ生きていけない。依存しなければ生きていけないからこそ、虐待されても小さな子どもは黙っている。自分を愛してくれるから、親がやっているのかもしれない

いと。ご存じだと思いますが、アメリカのマズローという心理学者が欲求段階説というのをあげています。欲求段階説をピラミッド型にたとえ、1番上が高次の欲求で、1番下が低次の欲求だと言っています。これを5段階に分けて、1番下の欲求が生理的欲求です。人間の生理的な部分で、お腹が空いたら食べる、眠くなったら寝るなど、いわゆる生存を可能にしていく欲求ですね。その上が、安定と安心の欲求です。今たくさん食べなければいけないのではなく、いつもいつも食べたい時に食べられるように、眠りたい時に眠れるように、あるいは決められた時間にできるというのが、安定安心の欲求です。そしてこの上に、所属と愛の欲求があります。所属とは、どこに属しているか。愛というのは、目にかけている。よく、生理的欲求を考えてみればわかりますが、澤井の家の子どもだというのがあればこそ、安全な食事を与えていく。これが、まず何でもいいから安全な物を食べて、所属と愛があるというのが人間として生きていくという欲求の最低条件で、欠乏欲求と言います。これが欠乏すると、なかなか人間は生きにくいのです。だから、例えば虐待されている子どもは、所属があるから食べていける。所属があれば、今は食べさせてくれないけど、あとで食べさせてくれるというのがあります。実は、この欠乏欲求というのは3番目に上がってきますが、これを求めて虐待を受け入れてしまう。この上に、承認の欲求があります。どんな時も、一人一役を与えるというのは、実はこの承認です。

最後に自己実現があります。

実は、小さな子どもに所属を与え、愛を与えるということも、大人にとっては社会的・市民的自立として要求されていることだと思います。最初、社会的・市民的自立とは、過去において男の人に求められていました。だから長になるのは男が多いと言いましたが、もう1つ大事な事は男と女の関係だけではなく、小さな子どもに対しての責任というのがあると思います。それは、マズローの欲求段階説でいけば、所属がはっきりしているからこそ家に帰ってきてほっとしたり、所属がはっきりしているからこそ食べられたりというのがあるわけです。虐待を受けても我慢するというのは、これらを外で済ませてきたらもらえないのではないかとこのようになるからです。このようになってくると、小さな子どもに対して、あるいは老人に対して、身体障害者に対して手助けをするということは、完全に社会的・市民的自立として重要なことだと思えます。ですから、家族だから当たり前だという時代から、先ほど選択縁というのが出てきましたが、家族がそれほど安泰ではないという時代になってきています。依存しなければ生きていけない子どもや依存しなければ生きていけない障害者だとかそういう人たちにとって必ずしも安全な所ではなくなっているということです。その中心人物である男とか女とかではなく、成人している大人に責任があります。

5番の「性的自立」があります。これは、よく言われる「産む権利、産まない権利」

にかかわってきます。「嫌い嫌いも好きなうち」というのがありますし、男女の性関係を受けるとき、女性は積極的に受けるのは良くないと言われ、女性は嫌と言わなければいけない。これは日本だけではなく、アメリカもそうです。女の人が「NO」と言っても、それを聞かないで迫っていくことが男性らしいということが、アメリカなどでも平気で言われていました。しかし「そうではない、嫌は嫌なのだ」と、はっきり女の人が言う。反対に男性も言う。この性的自立は、セクハラともものすごくかかわっていきます。

セクハラのはラスメントというのは、「嫌だ」というのをしつこく追うことです。例えば大きな子が小さな子に「嫌だ」というのにどこまでも追いかけていく。あるいはブランコに乗って「怖い、もうやめて」というのにしつこく押ししたりしているのをよく見ますよね。あれがハラズメントです。「嫌だ」と言ったら、やめればいいわけですよ。セクハラは、セクシャルなハラズメントですが、パワハラもあります。パワハラとは、権力を持って嫌がることをすることです。セクハラは、嫌だということに対してやり続けることであり、イヤだということから手を引けばいいわけですよ。

いろいろな所でセクハラの話を書きませんが、「先生、セクハラは女のわがままじゃないですか。同じことをしても、こちらの方はよくて、こちらの方は悪いというじゃないですか」と、言われたことがあります。それは、やる方から見ているのでしょう。やられる方から見る時代になり

ました。同じことをしても、「NO」と言われたら手を引けばいいのです。売春業も「売春」から「買春」といわれるようになりました。「売春」のときは、女の人が罰せられましたが、今、買う方が、男の人が罰せられるようになりました。これも、男女で性的自立が、女の人に認められるようになってきたからです。この性的自立も新しい局面、個人を大事にするという局面が出ているわけです。

「今の社会、個人が大切になった」と言いましたが、「今の男女平等は人権問題ではなくて、女の仕事がなくなったということである。女でしかできない仕事が無くなった」と言っています。私は、主婦専業と専業主婦というのがあると思っています。この専業で主婦をしている人には、働きたいのだけれど事情があって働けない人と、最初からお金を稼ぐのではなくて家にいたい人と、2タイプがあります。私が言う主婦専業というのは、自分から主婦という仕事を選んだ人です。本当は働きたいのだけれど、する仕事が無いからやむを得ず主婦をしている人が、ごちゃ混ぜになっています。主婦専業の人は、主婦をやったらいいわけですよ。自分はこの仕事をするというのを決めてやっているわけですよ。でも、今、主婦専業がいなくても生きていける時代になっています。単身者が増えたというのはこのことですね。男の人だって、独りでも生きていける、女の人だって、職業を持てれば独りでも生きていけるようになりました。これは、女の人の仕事が無くなったということです。でも、子どもはこれができ

ません。高齢者もできないのです。

皆さんの中にも結婚するときに「ベターハーフ」と言われた方と、「パートナー」と言われた方がいらっしゃると思います。「ベターハーフ」とは、お金を稼ぐことしかできない人と家の仕事しかできない人とかが一緒になって一人前になるということです。でも今は、死語になっております。以前、県庁の人と結婚した教え子がいました。新郎の上司が、「大変重要なポストにいるから、内助の功を発揮して、花婿が仕事をできるようにしてあげなさい」と言っていたので、私は「県庁の仕事と、子どもを育てる仕事と、どっちが秋田県にとって重要かといえば、多分子どもを育てる方じゃないですか」と言いました。そういうことを平気で言える時代から、「パートナー」としてお互いに助け合っという時代になってきました。成人だったら独りで生きていけるが、二人で生きていく方が独りで生きていくより、よりよい関係ができる、よりよい生き方ができるという考えが変わってきています。私の時代は、結婚しなければ一人前ではなかったですが、一人前は卒業して仕事をするようになればなれますが、結婚というのは、より良い生活が出来るように、より良いライフスタイルということになっているように思います。

今の時代、男女平等を言わなければいけない。というのは、生活の中に女性がしなければいけない仕事が無くなってきました。男性は、昔から経済的自立と言われてきました。働き方は違うけれど生きていくのに必要なものを稼いでくることは、

昔から変わっていません。ところが、女性は、というと、生きていくために必要な、稼いできたものを使って、生きていけるようにするという仕事が、その部分が社会化され、そこに、男女平等だとか男女共生というのが出てくるわけですね。

先ほども言いましたが、中世の時代というのは、女性がやらざるを得なかったから誰も男女不平等とは思いませんでした。それが、女性の仕事が無くなって男性の中に入っていったときに、排除されることで不平等が出てきました。実は、男性だって不平等を受けているわけです。男性はお金を稼がなければ男じゃないなんて言われたら、これはすごい不平等ですよ。今は、男性が台所仕事をするということはよくなりましたが、どこか女性的なことをやっているとおかしいとか言われたりします。これも、男女不平等ですよ。

よく私は、人工子宮機ができたらどうなるのだろうと考えます。人工子宮機ができたら、多分人間ではなくなるのではないかと思います。しかし、現在人工子宮機とは言わないけれど、自分で産まなくても自分の子どもが産まれるわけです。だいぶ変わってきた時代において、これまでの男らしさとか女らしさというのはどうなのでしょう。そういう枠組みで決めていいのでしょうか。これが、「ジェンダー」問題です。男が女になるとか、女が男になるのではなくて、自分らしくなんですね。これまでは、男らしい、女らしいという枠組みで決められていた。そうではなくて、自分がどうしたいか、これが

心地よい人間関係をつくるということにもなり、その為には男とか女とかの枠組みを与えないということになるのだと思います。

半年くらい前に、「男女平等なら男と女と、公衆トイレ一緒でもいいのではないか」という質問を受けました。ちょっと違う問題ではないでしょうか。人間の性とおもしろくて、性行動の「セックスなこと」と、ジェンダーの「～らしきみたいなこと」があり、これを一緒にしてしまうというのがあります。ここで言っている男女平等とは、男と女が一緒になるのではなくて、枠組みを与えないということです。男だからこう、女だからこうではないのです。男だから女だからというジェンダーの枠組みを与えない。ジェンダーというのは社会がつくったものであり、心理的につくられたもの、文化がつくってきたものだからです。人間がつくってきたものなら、人間が時代に合うように変えられるという考えがあります。だから、男女の性別分業が言動的に悪いと言うけれど、今の時代に合わないのであって、昔の時代には人間が生きていく適切な方法だったわけです。今の時代に、伝統



的な生活分業が適切ではないのではないかとというのが、ジェンダーの考えです。

ただ、難しい問題があります。昔は、人が生まれたとき男か女かというのを、立ち会った人が決めて登録して、男あるいは、女として生きてきたわけです。しかし、この性別的な上に自分がどう思うかというのが出てきました。だから、生物学的には男であっても、気持ち的には女、生物学的には女であっても、気持ち的には男というのが出てきたわけです。こういう人たちが気持ち的に女だと言っていたとすると、伝統的なジェンダーの女を思うわけです。例えば「おすぎ、ピーコ」は、男のままですが気持ち的には女なのでしょうね。テレビを見ていると、伝統的に女性の行動と言われた事をしてしています。今、そのような行動をとる女性がいるのでしょうか。それから、おすぎとピーコのトーク番組を見ていると、伝統的に女性の仕事だと言われていた料理の作り方の話が出てきますよね。あれも、伝統的に女性は料理が上手だということになっているんですね。反対に、女性から男性になった人は、例えば歩き方も男性のような歩き方をすると言います。この辺のところから、すごく混乱し、自分がこちらの性だと決められ、それが反対の性だと分かってきたときに、男とか女が伝統的な男らしさとか女らしさにつながっていくのではないのでしょうか。芸能人の「ピーター」は、どっちなのだろうと思うのですが、きっとどちらも自分らしいのでしょうね。男の格好をするときは「池畑慎之介」と言いますが、女性の格好をするときは「ピーター」と

言い、絶対に「池畑」とは言いませんよね。あれをみると、あの人はジェンダーを変えているのではなくて、もしかしたら演技を楽しんでいるのかもしれないね。「美川憲一」は、着ているものが女性的だと言われているだけで、言葉や人に対する厳しさなどを見ていると、本質的には男なのではないでしょうか。これまで女性が好きだと言われていた宝石をしたりしていますが、話をしていくと、決してこれまで言われている女性のようにはなっていないと思います。あれは、自分らしいのではないかと思います。着ているものや、付けているものはどうみても伝統的な女性ですが、しゃべり方とかはこれまで言われていたジェンダーの男ですよ。もしかしたら、自分らしい生き方なのかもしれないね。一方、「カルーセル麻紀」は、戸籍も変えて女性になりましたが、行動をみると悔しいとき「ばかやろう、てめー」と言って男っぽくしています。多分、あの人も自分らしいのでしょう。私たちは、「カルーセル麻紀」を見て女になったと思うけど、本当の女になっているかというところではなく、また本当の女とは、昔から言われているジェンダーではないと思っています。ただ外見からすると伝統的な女になっているのではないのでしょうか。

今、男性と女性の着ているものが一緒だと言われています。現在小泉首相がクールビズをやっていますが、あれがもっと進んで男性からネクタイが無くなったらどう変わるのか。女性がズボンを履くということは、抵抗無く受け入れられま

したよね。私は男性の先生と仲人を行ったことがあります。その先生が仲人の最初の言葉で「私たちは事実婚をしているわけでもありませんし、別姓を名乗っているわけでもありません・・・」というのから始まりました。なぜ、別姓の方がよいかというと、女性が名前を変えるとそれまでの女性の仕事が抹殺されるからというのがあるからですね。私は、その結婚式でズボンをはいていきたいと思い、先生やお嫁さんの家の方に相談しました。そのとき、お婆さまがいらして「今の女の人は、ズボンをはいていても正式な服装になります」と言われました。女性がズボンをはくことは、認められていて、冠婚葬祭でもはけるようになりました。しかし、男性はスカートをはけないようです。でも、まずネクタイがとれて、ネクタイをしないことが当然というようになっていくと、スカートをはく人が出てくるかもしれないよね。

ここで、なぜ女性が男性の格好をしても中断されないで、男性が女性の格好をすると中断されるのか。なぜ、男性が妻の名字を名乗ると少し下にみられて、女性が夫の名字を名乗ると何も言われないのか。女性が男の格好をすること、男性と同じように社会的に活躍することはよいと言われるけれど、家の中に男性が主夫専業になるとおかしいと言われる。これらも、男女平等の視点から考えるとおかしいのではないのでしょうか。フランスの小学校の先生が言っていましたが、クラスに算数ができない男の子と女の子がいるとします。最初に、二人に一生懸命算数を

教えると、どちらがあきせめるのが早い
かという、女の子に教えることをあき
らめるのが早いそうです。男の子には、な
かなか諦めきれない。文学部というと女
性が多く男性はあまり行かないとか、工
学部はほとんど男性です。これは、私た
ちが当然のこととっていますが、実は男
の子、女の子と枠組みで考えているから
です。

男と女ということを考えていくときに
「そんなことを言っても、男の子と女の
子を比べれば、男の子の方は力が強く、女
の子は力がない」というのが出てきます。
確かに平均的に見ると男性の方が手も大
きく力もある。しかし、平均というのは、
いるようでいないということです。現代
社会の考えでいくと、個々で見ると力の
強い女の子もいれば力の弱い男の子もい
て、いろいろあります。平均で見る見方か
ら、一人一人を見ていく見方をしてい
かなければいけない。そのときに、資料に
ある「イコールティ、イクウィティ」の考
えがあります。「イコール」というのは、
量的に平等なのだと思います。100 なら
ば 100 という考え方です。この「イコ
ールティ」の考え方でいくと、男女は差
別が出てくるのは当然だと思います。し
かし「イクウィティ」は、公正さや公平
性という、質の違うものをどう比べてい
くかということだと思います。この考
え方を持っていかないと、男女平等教
育だとか男女平等ということにはなら
ないのです。また個々で見る、枠組み
でみないということは、「イコールティ」
の見方ではなく「イクウィティ」の質
の違いで見るのだとい

うことだと思います。

資料 4 の②「男女別の生き方」とは、
これまでの伝統的な生活分業によってい
わゆる伝統的なジェンダーと言われる生
き方でした。今、ジェンダーフリーと呼
ばれているのは、男とか女の枠組みを
与えないで個人、自分らしく見てい
こうとする意識です。現在、「ノーマ
ライゼーション」や「バリアーフリー」
は障害者に言われていますが、障害
者は、社会や家の外になかなか出
ることができませんでした。障害
者も外に出て行けるように、まち
づくりを考えましょと、やっている
わけですね。

皆さん、新幹線に乗って東京駅に
着くと、ホームはバリアーフリーに
なっていないじゃないと、ノーマ
ライゼーションの考えになっ
ていないじゃないと思いませんか。
実は、障害者の為のバリアー
フリーは、ホーム内のずっと遠
くにあり、たしかにスロープ
にはなっていますがそんなに
簡単にはいかないわけです。
秋田にもありましたが、車
いすでホームに降りよ
うとしたらバリアーフリー
のあるずっと遠くまで行
かなければいけないので、
すごく時間がかかっていた
わけです。

男女平等も同じで、男女平等と口
では言っていますが、実は細
かいところを見ると平等
には見えるけれど平等の
心が入っていないのでは
ないかと思いませんか。
バリアーフリーもどう
して真ん中に置かない
のと思うわけです。それ
は、一応バリアーフリー
という形を作ったけれど、
本当に障害者が行き
やすいようになっている
か。必ずしもそうでは
ないです。男女平等

も、進んではいるけれど、形やシステムがあるだけで日ごろの生活の中ではまだまだ進んでいないのではないかと思います。私たちの心の中にある、ずっと育てられてきたものというのは、どんなに努力しても出てきてしまいます。しかし、それがあるということを感じた上で枠組みを与えないようにするという努力はできるのではないのでしょうか。私は今の、ジェンダー問題で、どうも誤解があるように思います。ジェンダーを、全部壊せと言っているように、聞こえます。女だからこうではなく「私はこうしたいということが、優先されるようにしよう」ということを、ジェンダーで言っているのだと思います。

ノルウェーでは、男女で12か月育児休暇がありますが、女性が全部取ってはいけなそうです。男性も必ず取らなければいけない。男性が10か月取ったら、女性は2か月。もし、女性が取らないとすると、10か月にされてしまいます。今、日本だと育児休暇は男性も取れると言っていますが、男性が取る人はほとんどいませんよね。なぜかという、「12か月育児休暇があります。男でも女でもどちらでも取っていいです」となっているからです。ノルウェーの場合は、12か月ありますが、10か月以上は1人では取る事ができません。そうすると、給料をもらえて12か月、育児休暇を取った方が、子どものためにもよいので、男性も取るわけです。それがいわゆる、積極的改善措置と言われているもので、男女共生や男女共同参画が進むまでの1つの方法なのです。これは、

ずっと行われるものではなくて、それ以前はノルウェーも男性が育児休暇は取りませんでした。しかし、男女が取れるようになり、それを定着させていくために積極的改善措置をとりました。システムはいろいろできているけれど、まだ考えなければいけないシステムがあります。考えなければいけないシステムを作っていくためには、小さい時から枠組みを与えられないような見方をしていかなければなりません。先生たちが、このような見方を全部できないこともあるかもしれません。しかし、これらを見た上で、枠を与えているかどうかを考えていくといいのではないかと考えています。

「ジェンダー」というのが、すごくバッティングを受けていますが、「ジェンダー」は「男らしく、女らしく」を無くそうというわけではありません。枠を与えないということです。「自分らしく」とあったのは、個人が大事にされる社会ということだと思っています。資料8にあるように、同じことをやっても男の子と女の子に対する表現が違う。これが枠を与えているということです。親に質問をすると面白いのですが、息子と娘が両方いる人と、息子だけと娘だけでは、育て方が違うそうです。両方いる方は、やっぱり昔ながらのジェンダーが出てきているようです。息子だけや娘だけの方は、母親が男女共生についてどう考えているかということが影響してくるようです。学校でも同じことをやっても、男の子と女の子と違う評価をしていないか。違う評価をすると、枠組みを与えていることになるし、心

地よい人間関係は作れませんよね。よく「先生、そんなに頑張っても、今の女子学生はみんな結婚したいと言っていますよ」と言われます。本当でしょうか。よくよく聞くと、やはり男の人は、朝から晩まで働かなければいけないとか、余裕のない働き方をさせられているとか、あるいは女の人はどちらかというと、就職がかなり厳しいですよね。そういう所も影響しているようです。だから、表面的ではなく本当の意味で、男とか女という枠組みを与えないで考えていくということを、先生方にやっていただいて子どもにやっていただきたいと思います。それこそ、居心地のよい人間関係を作っていく基礎ができるのではないのでしょうか。

高齢者の調査をしますと、たくましい女の人が望まれているところもあるようです。女の人にも男の人にばかり頼らず、自分で生きていくことを考えてほしいという高齢者もかなり出てきているようです。調査結果の見方で二つありまして、全体として80%だから多いと考えるのか、20%だから少ないと考えるのか。前に調査をしたときには5%しかないけれど、今になったら10%になったから多いと考えるかですよね。男女共生とか男女平等の考えは、全体で考えていくのではなくて、これまでこれしかなかったものが少し多くなったから進んだと考えるべきではないのでしょうか。それが、実は量ではなくて質で考えていく考えからで、男女の関係とか違うものを考えるときには、質的な考え方が必要なのだと思います。

居心地の良い人間関係というのは、人

から枠を与えられないで生きていくことで、その1つに男とか女の枠を与えないということですし、小さいときから、されていかなければならないのではないかとということでお話させていただきましたありがとうございます。

【質疑応答】

質問：資料 1. ②非言語的表現を使うとありましたが、今日お話しして頂いた以外に非言語的表現の例がありましたら教えて頂きたいと思います。

先生：非言語的表現というと、普通は物とかですが、直接ということで行くとか、非言語といった言葉なので少しおかしいですが、そういうのがあると思います。もう 1 つあるのが、物とかの変わりに本を読むとか、違う面から考えていくということも入るのではないかと、またしゃべる時の距離の取り方も出てくるのではないかと思います。よく、視線を同じにするということも非言語的表現なのではないでしょうか。目を見て話すとか遠くから話すとか、また、体を使ったり物を使ったりということも入るのではないかと思います。

質問：秋田県は「男女共生」というのをずっと使われていますが、青森県では「男女共同参画」として取り

組んでいます。違いみたいなものは明確にあるのでしょうか。

先生：秋田県ではなくて、秋田市が使っているのですが、私はこのように考えています。いつの時代も男と女は共に生きてきた。その共に生きてきた生き方が、違っているのではないかと。今の時代に、昔ながらの生き方は合わないのだらうと思います。なぜ男女共同参画と言うかということ、最初、女性の社会進出から男女の共同参加になってきました。共同参画とは、1 つの男女共生をするための方法だと思っています。だから、最初ころは、女性は家という考えだったので、外に出て行くという社会進出、出て行ったけれど何も変わらないので、男と女で共同参画するということ。それでも、いろいろな審議会に行っても女性はほとんどしゃべらない。男と女がいても結果が決まらないということが出てきたのが、男も女も意思決定を同じようにしなければいけないと言ったのだと思います。ですから、男女共同参画とは男女共生する 1 つの方法として、出てきたものだと思います。秋田市で男女共同参画に最初から参加していますが、引き受けるにあたり「男と女の問題だけで片付ける考えであれば、私はやりたくない」と条件を出しました。歳を取っているから、若いからとか、障害者であるとか、そうではないとか





ではなくて、基本的には市民共生という考えを持たないと、男と女の戦いだけになってしまいます。ですから、共同参画というのはいつの時代も男女共生してきたが、その共生の仕方が合わなくなったために出てきた一つの方法であると思います。これから先、男と女の違う形が出てくるかもしれません。現在少しずつ出てきていますよね。コラボレーション、「協働」という考え方です。社会は次から次へと変わっていくけれど、いつの時代も「共生の時代」であり、その一番良い形を求めているのだと思います。

自分は男だから女だからと言っても、いくら性的に男性の機能、女性の機能を持っていても「自分は性的とは違う性なのだ」ということがありますよね。なぜそのようなのかまだ分かっていませんが、性転換をした人たちが言っているのは「妊娠中に脳に何かがあたって、体は男になったけれど、考え方は女だ」というのです。そし

て生まれてきた時からだそうです。昔は、いなかったのでしょうか。たぶん、性転換をする人はいなかったと思います。もししていたら生きていけなかったと思います。今はそれだけ生きやすい社会になったということでしょう。生きやすい社会になったからそれだけ選べる。いろいろな生き方を選べるようになったから、それだけ複雑になって人間関係も難しくなってくるわけです。

質問：先ほど積極的改善策として、ノルウェーでの育児休暇をあげていただきましたが、日本の中で改善策として知っている例はありますか。

先生：ないと思います。秋田市ではある男子職員に「絶対、育児休暇を取りなさい」と言いました。いくら育児休暇を男女とも取れると言っても、誰もやる人がいないのは駄目だから「取りなさい」と言っていたのですが、最後は「お願いだから取ってください」と言いました。結局、その職員は1か月取りました。しかし、その後「取りたいな」とは言っても続かないのです。ノルウェーのように強制的にやるのなら別ですが、実際は運用できないということと、意識が違うからです。やはり積極的措置と云ったら、ノルウェー方式的にやらなければいけないと思います。でも、多分駄目でしょう。少子化の委員

会だったと思いますが、地域の人たちの中でこのような意見がありました。同じ所に勤めていても、上司が変わると、育児休暇に反対の人がいる。3人めの子どもを産むときに「そんなに子どもを産みたいのなら、仕事を辞めろ」と言われたそうです。前の上司には、「育児休暇を取りなさい」と言われた。ですから、まだ積極的措置までいってないのではないのでしょうか。生活するには、稼得役割と世話役割がなければ送っていきけません。稼得役割とは、お金を稼ぐという意味で長い間、男性である夫に課せられてきた役割です。世話役割とは、女性である妻に課せられてきた役割です。男性は稼得役割が主で、女性は子どもが生まれれば世話役割を主に考えなければいけないとなるわけです。つまり、男性にとっては、稼得役割が主たる役割で、世話役割が従の役割となります。先ほどお話しした秋田市の職員が「育児休暇を取って良かったことは、僕は稼得役割も主の役割だし、世話役割も主の役割だということがわかりました」と言っていました。「なぜそのように言うの」と聞いてみたら、「育児休暇をとり、世話役割を一生懸命やらなければいけなくなり、共働きとは主と従ではなくて、両方、主でやらなければいけないからです」と言われました。育児休暇を男性が取

るということを、積極的措置で八戸市でもやった方がいいのではないかと思うのは、「主・主」という考えができるかどうかです。これがないために、男女共生は進まないと思います。妻が世話役割をやって、妻が大変な時だけ手伝うという考えは駄目だと思います。両方「主・主」でなければいけません。

積極的措置は、日本は無理だなと思います。先日、男女共同参画社会基本法の行動計画の中間年で、秋田県が公聴会に選ばれ私も参加してきました。どうも、解釈はできていても具体的にどうやるかということが出てこないの、それぞれみんなが別々のことを考えるわけです。具体的なことをどう考えるかという時期にきているけれど、役所は具体的に考えるとプライバシーの侵害で駄目のようです。具体的にいけばいくほど、プライバシーの侵害になるじゃないですか。ですから、なかなか進まないのではないかと思います。せいぜいできる事は、啓発事業なのではないかと思っています。積極的改善措置ができるのは、もう少し啓発してからではないのでしょうか。